

● は し め に ●

◆◆◆ 本書の目的 ◆◆◆

本書は、日本語教育の方法や日本の文化・社会に関する研究を行っている東京外国語大学国際日本研究センターによる「国際日本研究」の入門書です。国際日本研究は日本国内に閉じた一方向からの視点ではなく、外からの目を意識し、多様な関心や視点を反映した新しい「日本研究」を目指したものです。基礎教養（日本の伝統・習慣）を踏まえ、たうえで「ステレオタイプ」に語られる日本観とは異なる日本の姿を描くことを目指しています。さらに、さまざまな日本の個性——規範的なことと多様性、普遍的な部分と個別的な部分——を盛り込んだものです。ステレオタイプの日本像を意識したうえで、日本を異化・複数化するための多様な切り口を用意しました。その意味で、「日本をたどりなおす」ものだといえます。そうした目的のもとで国際日本研究にふさわしいテーマ、トピック 29 を精査して、各分野の現在の第一線の研究者が本文を書き下ろし、また、外部の専門家に直接インタビューした内容をまとめました。内容は人文科学を中心に、言語・文学・文化・社会・歴史から構成され、東京外国語大学の特色と国際日本研究の水準を意識できるようなものになっています。本書は、日本に関する最新の研究をまとめた本文が中心となっていますが、本文を読んで理解するだけではなく、学習者一人一人が自分の視点、意見を持ち、それを表明すること、議論することも一つの目的です。そして、そのテーマを深く考え、調べることを通じ、成果を発表することが期待されます。日本の現状を知るだけでなく、同様のトピック、テーマ、問題のそれぞれの国や地域での状況を改めて考えるためのきっかけとして使っていただきたいと考えています。いわば、日本を自分を映し出す「鏡」にして、自らを振り返る契機としていただきたいということです。本書は、主に日本語を外国語として学習している日本語を母語としない方が日本語を勉強すると同時に、国際日本研究の入り口に立てるようにと意図されたものです。本文を読んで理解するだけではなく、読んだことで教師、学習者一人一人が自分の視点、意見を持ち、それを表明することが目的であり、クラスで学習する場合、そのなかでの議論を期待しています。さらに、そこで得た新しい視点でテーマを深く考え、自ら主体的に調べることを通じ、成果を発表することが期待されます。その意味で、発信が重要な意味を持って

います。本書は、日本の現状を知るだけでなく、同様のトピック、テーマ、問題について、それぞれの国や地域での状況を改めて考えるためのきっかけとして使っていただきたいと考えています。「発表の方法」では、各章にスピーチ、ブック・レポート、ポスター発表、ディベート、ディスカッション、プレゼンテーションなどの形で口頭での発表を促すよう設定されています。口頭発表の評価、レポートの書き方、発信の前提としての調査の方法についても挙げてあります。本書は、日本語を母語としない方々を最初の読者対象として考えていますが、日本語を母語とする方々にも自らの足元である日本について考え、「日本をたどりなおす」ために読んでいただきたいと思います。また、本書を読んだ後の発表、発信は、日本語母語話者にも必要なものだと考えます。

29 のテーマの選択にあたっては、留学生あるいは海外で日本を学ぶ学生たちが知りたいているトピックを反映するように心がけました。それは、東京外国語大学で留学生に教えている教員、あるいは研究協定を結んでいる海外の大学の教員に対するアンケートやインタビューにもとづいています。「宮崎駿」「日本人の宗教観」「天皇・天皇制」「日本国憲法」などは関心の高いトピックでした。海外の人々が日本のどこ・何に興味をいだいているかがうかがえます。

◆◆◆ 本書の内容 ◆◆◆

本書はまず、日本を外から眺めた視点を提示するものとして、留学生による座談会から始まります。各章の内容に関連した留学生の意見は各章の前にもあります。第1章は身近な言葉についてです。日本語を学習している方々にとっては学習の対象である日本語について、客観的に眺めたり、また、他の言語との比較から見た日本語の姿を見たり、母語との比較の視点で考えたりすることができます。日本語母語話者にとっては、毎日使っている言葉をあらためて見直す機会になります。特に外国語との比較という視点は新しいものかもしれません。第2章は、日本語を使った芸術ともいえる文学探索です。古典や現代の文学で日本を代表するようなもの、日本の文学といえば挙げられるようなものについて取り上げています。取り上げた文学作品について、あるいは同じようなジャンルの外国文学についても考えてみてください。日本で有名な文学作品が外国にルーツがあったり、それが他の国にも広がりを持ったりしていることがわかると思います。

続いて第3章では、現在海外で人気のある日本文化についてさまざまな側面から考えます。伝統文化、ポップカルチャー、世界中にファンのいるアニメ、そして、文化を伝える翻訳についても考えます。「ニホン」「ブンカ系」など、通常は漢字書きにされるものをあえてカタカナ書きにしたのは、漢字で表現すると掌からこぼれ落ちてしまうものがあるからです。つまり、漢字で示される場合につきまとうステレオタイプを越え、より軽やかな、現代風の、特別の、といった意味合いを込めて使っていることを示しています。後半の3章は社会、歴史に関するものです。日本の現在がどこから、どのような過程を経てきたものか、近代から現代にかけての歩みを背景に考えようとするものです。後半も言葉に関する章から始まりますが、言葉そのものを扱っている第1章とは異なり、第4章では、日本社会の中での言葉のあり方、日本国内における言葉の多様性に焦点が当てられています。日本語を学ぶ人々についての物語もあります。続く第5章は、日本を知るうえで避けて通れない、天皇制、宗教、憲法などの問題を考えます。この問題を考えるうえでは歴史的な観点、そして、日本を外から見る視点が欠かせません。重い、むずかしい問題ではありますが、知ってもらいたい、考えてもらいたいテーマとして選びました。

最後の第6章は、現在日本で生活する人々の暮らしのなかの問題を扱っています。教育、食糧問題、労働問題やジェンダーに関する問題、そして忘れられない3.11東日本大震災のその後をめぐる物語もあります。どれも今日的なテーマですが、ここに至るまでの歴史を踏まえた考察になっています。現代の日本を知るために避けられないテーマでしょう。

日本を考える、日本を「たどりなおす」ための問題、テーマを考えてみたら29になりました。この29の本文を使って、読者一人一人に日本を「たどりなお」してほしいということから「29の方法」と名づけました。29という一見まとまりのない数は、「国際日本研究入門」はこれで完結するものではなく、今後さらに広がっていく可能性を持つものとして考えていることを示しています。